

防災・災害対策



雨宮 聖 (あめみや・しょう)さん
派遣国：ソロモン
派遣期間：2017年10月～2019年10月
応募時を思い出してひと言！
きっかけは 好奇心から。
語学スキルは 調べながら読める程度。
家族の反応は 応援。

「国家災害管理局でドローンを利用した洪水後の被害状況把握、津波避難マップの作成を行っています。前職は橋梁の耐震補強設計でした。同じ「防災」でも業務内容が異なりますが、日本でドローンを使った業務に就く先輩から助言をいただき、また、大学時代に地理情報システム (GIS) ソフトを操作していた経験を生かして活動しています。先日、現地スタッフにドローン操作からマップ作成までのノウハウを習得して自主的に周囲に教え始めるなど、少しずつですが活動の進歩を実感できるのがうれしいです」

映像



安達弓華 (あだち・ゆか)さん
派遣期間：2017年6月～2019年6月
派遣国：ボリビア
応募時を思い出してひと言！
きっかけは 新たな挑戦として。
語学スキルは 皆無 (スペイン語)。
家族の反応は 母は反対 (心配)、父は賛成 (共感)。

「サンタクルス市の職業訓練学校の映像学科で、ビデオ撮影 (編集、照明、音響) と写真撮影の技術指導をするほか、広報の一環として仲間の協力隊員の活動や、ボリビアと日系社会を紹介する映像の制作を手がけています。現地の人は明るく優しく、私のつたないスペイン語に熱心に耳を傾けてくれます。仕事に追われていた日本の生活と比べて、好きな映像制作に打ち込み、自分の技術が人の役に立っていると思うとやりがいがあり、幸せな日々だと感じます」

こちらも募集中! レア職種

協力隊として活動する

あなたのそのスキル、生かされます WANTED

途上国が抱えるさまざまな課題を解決するために、JICA海外協力隊の仕事には120以上の職種がある。募集の多い職種や少しめずらしい職種に就く現役隊員、元隊員の活動を見てみよう。あなたが持っている技術や経験も、きっと途上国で役立つことができる。

文・光石達哉、編集部

方法よりも目的 現地でできる技術を考える

村の特産品を広めるため 自らの営業経験を生かす

会社員としてバリバリ働いていた永岡愛さんは、「大学で国際関係を学んだのに、このままではずっと国内で仕事するのかな」という思いが募り、協力隊に応募した。「大学時代、旅行業の資格を取ってガイドのボランティアをやっていたことから、最初は「観光」で応募しましたが不合格。その後、JICA関係者と話したときに、今の職業に合っているものがないとアドバイスされ、2度目は「コミュニティ開発」を選び合格しました」

派遣されたのは、マレーシア・ボルネオ島のサバ州ウルスナガン・モンゴルバル村。自然保護区内に住む村民の収益向上に向けて、特産品の販売の強化を手伝っている。「村では竹の手工芸品を作っていました。こうした伝統工芸品は村の人には日常のものでも、外人から見ればかわいいものが多い。日本人にはコースターや筆箱、カードケースなどの小物がお土産用に人気です」

村外の町で新たな販売先の開拓も行った。会社員時代の経験から、製品の魅力をわかりやすく伝えるパンフレットや商談書などの営業ツールを作成。活動が功を奏して、州の手工芸センターにも置いてもらえるようになった。「サバ州は日本人が多く住んでいて、彼らの中で産業や流通にくい人々に製品を見ていただき、その人に気に入ってもらえれば、周りにも広まっていくからです。日本にいたころ、同様の方法でランニングコーチに商品を紹介してもらった経験が生きました。物を売るためには、人のつながりが大切とあらためて感じました」



村の子どもたちにランニングレースを!

ボルネオマラソンに参加する永岡さんのランニング仲間やコーチが村を訪れたとき、その協力を得てランニングレースを開催。こうした観光客と村人の交流イベントも10回ほど開催している。

特産品を通じて村の収益向上を目指したい!

コミュニティ開発 (マレーシア)

永岡 愛 (ながおか・あい)さん
派遣期間：2017年1月～2019年1月
大手製薬会社でスポーツ飲料・食品の販売・営業を担当。会社が協賛するランニングクラブの運営にも携わり、自身も「一緒に走っちゃえ!」と大阪マラソンや京都マラソンに出場するスポーツウーマン。帰国後は会社に復職予定。自身の長所はコミュニケーション力 & 「ノ一人見知り」。
応募時を思い出してひと言!
きっかけは 海外で働いてみたかったから。
語学スキルは 英会話はできるかな? でもビジネス英語は自信なし。
家族の反応は 驚いていたけれど、喜んで応援。



同僚の農業普及員や巡回地域の農家の人たちと一緒に、有機肥料 (ボカシ肥料) 作り。

「日本ではコンビニのフランチャイズ店の問題点を見つけ、その店主さんにとりよる改善を提案するか、どうモチベーションを上げるかを日々学んでいました。中には自分のやり方にこだわった店主さんにもいます。そういう人を説得して動かした経験が、今の農家の指導に生かされています」と話すのは、コンビニ会社勤務の経験を持つ岡田尚也さん。モザンビーク北東部のナカラという港町の郊外の農村に、野菜栽培部員として赴任した。トマトやタマネギなどの野菜を作っているものの、規模は大きくなく土もよくなかった。「土壌改善が必要と思い、ボカシ肥料と呼ばれる有機肥料の導入を試みています。現地の土壌の状態に合わせて材料を自由に組み合わせることができると聞いて、現地ですぐに手に入りやすいトウモロコシの削りカス、鶏糞、草木灰などを活用しています」

野菜栽培 (モザンビーク)

岡田尚也 (おかだ・なおや)さん
派遣期間：2017年1月～2019年3月
大学の農学部を卒業後、コンビニチェーン会社に就職。店舗の社員、店長を経て、各店巡回や情報発信を行うアシスタントスーパーバイザーの職務を経験。食に関する製造小売業に興味を抱いていたことから、もっと生産者に寄り添いたいと応募を決意。帰国後も「食や農業に関わる仕事を続けていきたい」と話す。
応募時を思い出してひと言!
きっかけは 自分がやりたいと思ったことに素直になれたから。
語学スキルは 英検3級 (応募できるギリギリのレベル)。
家族の反応は 反対しつつも「説得しても考えを変えないだろう」と最後は応援。

コンビニの巡回指導と農家の指導は似ているところがあります

岡田さんは農業の実務経験こそなかったが、大学の農学部や派遣前の研修で得た栽培の知識はあった。しかし、それをモザンビークの実情にあてはめるには、柔軟なものも必要だった。「派遣国では農具や材料のあるなしなど条件はいろいろ。農家によってやり方もさまざまです。方法を教えるよりも、何のためにやるのか目的を考えることが大切だと気づきました。作業の目的を理解すれば、現地にあるものを使って他のやり方も提案できるからです。私たちが去った後でも、現地の農家が継続できる方法を相談して実践してみる——そういう試行と実践がすごくおもしろいと思います」

試行錯誤する中で、農家の人たちの信頼関係も築かれていった。「最初は、この人は種や農具をくれる人」と思われていました。そこで、まずは一緒に作業しながら相手のやり方を学びました。現場の状況を知らなければ相手に響く指導はできないからです。その後、こちらの提案を目的とともに率直に伝えます。すると、それならこうしようとおたがいに納得できる新たな切り口が浮かび上がります。今は「技術をくれる人」と理解してくれ、私の活動に関心を示して実践する人が少しずつ増えているのがうれしいですね」

針灸 マッサージ師



両角 大智 (もろずみ・だいち)さん
 派遣国：ケニア
 派遣期間：2017年10月～2019年10月
 応募時を思い出してひと言！
 きっかけは 自分がアフリカで施術している映像が浮かんだから。
 語学スキルは あいさつ程度。
 家族の反応は 「えっ、応援したいけど奥さんどうするの?」(と親に)。

「ケニアには国内をはじめ近隣諸国から障害者を受け入れる職業訓練校があり、そこで視覚障害者に指圧・マッサージを教えています。生徒は点字でノートを取りながら指圧の効果や施術の方法、体の構造・機能などを学び、実技練習を積み重ねていきます。がんばって授業を受けていた生徒たちが就職を決めたり、自宅開業など自立を果たしていく姿を見るたびに、大きな達成感や充実感を味わっています。ときどき生徒を外に連れ出して、イベント会場で指圧のデモンストレーションなども行っています」

獣医・衛生



板垣 幸樹 (いたがき・こうき)さん
 派遣国：フィリピン
 派遣期間：2017年7月～2019年7月
 応募時を思い出してひと言！
 きっかけは もっと外国の人と話してみたかったから。
 語学スキルは 大学受験の語学力に毛が生えた程度。
 家族の反応は 2回目の応募だったので「またか、ついに」という反応。

「国営の酪農牧場で約150頭の乳牛を飼養しています。活動は繁殖業務、病気の治療の助言、牛乳の品質検査が中心です。赴任当初は、日本人の私に何が出来るのかを配属先のスタッフもわからなかったため、おたがい探るような時期がありました。自分が出来る仕事を伝えていくうちに次第に役割が定まってきました。2年目の今は、人工授精が可能な乳牛を探すために早朝から牛の観察も任されています。今後もコミュニケーションを十分に取るように努めながら現地の人の力になっていきたいです」

美容師



相馬 千春 (そうま・ちはる)さん
 派遣国：グアテマラ
 派遣期間：2017年3月～2019年3月
 応募時を思い出してひと言！
 きっかけは 人生を変えるチャンス!と感じて。
 語学スキルは SALUD (乾杯)!のみ。
 家族の反応は グアテマラってどこ?

「五つの美容院で技術・サービス面のサポートを行っています。特に力を入れているのは、お客さまにとって気持ちのいい空間を作り出す接客です。現地の美容師の接客がおろそかにならないように、「明るくあいさつして出迎える。髪型は最後にハンドブローで仕上げ、顔周りのケアをていねいに行う」と改善点をシンプルに三つにまとめました。この姿勢がリピート率を高め、結果的に収入向上につながると言っています。職業訓練校の美容科・理容科でカット・ヘアセット・メイクの指導もしています」

学芸員



慶野 結香 (けいの・ゆか)さん
 派遣国：サモア
 派遣期間：2017年1月～2019年1月
 応募時を思い出してひと言！
 きっかけは 専門知識を生かして海外で働いてみたかったから。
 語学スキルは 外国語を使って仕事する機会がなかったため、自信なし。
 家族の反応は 派遣が決まってから両親に報告。理解して応援してくれました。

「国立博物館の職員は私を含めて4人。展示ツアーなど日々の運営のサポートと、博物館としての機能を高めるために収蔵品の情報管理、展示手法、教育普及活動の改善を進めています。自分たちで展示を企画したことがない同僚とテーマを一緒に選び、サモアで伝統ダンスを行うグループの特別展も開きました。サモアでの経験は、日本人の私が他者の歴史や文化をいかに語るべきかについて深く考え、いい機会にもなっています。また、今後彼らが自国についてどう発信していくのかも楽しみです」

ブルキナファソからプロ野球選手を!

高校時代に海外で野球指導に励む人の新聞記事を読み、いつかやってみたくて考えた出合祐太さん。その夢がかない、2008年に協力隊員として野球を教えることになったが、派遣されたブルキナファソは野球未開の地だった。「国に野球連盟はあっても、ちゃんとグラウンドや道具がない。連盟からは『チームを作ってくれ、選手を増やしてくれ、メディア向けの広報活動をしてくれ、日本人なら出来るだろう』と頼まれました。けれども当時は、言われたことしかできなかった24歳の若造で、実現へのプロセスがわからない。それにブルキナファソの人たちは

考え方が合理的で、「野球なんかやってもお腹が空くだけ」と意に介さないこともしばしばでした。しかし、近所に住んでいた10歳の少年が興味を持って友達を集め、練習がようやく形になり始めた。「彼らは、なぜこう投げなのか、どうしたらプロになれるのかと、すべてに対して根拠を求めます。そこで少年たちに練習方法をひとつひとつ提案し、その意図に納得したらやるという感じで進めました」

2年の派遣期間を終えたのち、出合さんは新たな活動を始める。プロ選手になりたいという少年たちのために、日本での受け入れ先を探したのだ。日本独立リーグの高知ファイティングドッグスが名乗りを上げ、教えていたひとり、13年に来日した、その青年——サホ・ラシニア選手は現在もプレーを続けている。ブルキナファソで出会った少年たちと過ごした日々は、出合さんの考え方を次のように変えた。「情報のある日本に育った僕らは、プロになるのは簡単でないとわかっていました。でも、彼らはできないことをやるうとする。その姿に触れたことが今の私につながっています。できないと思うことでも理想を持ってやってみよう」と考えて活動しています」



できないと思うことでも挑戦する少年たちに動かされました

過去	野球隊員としてブルキナファソへ
現在	代表監督に就任

出合 祐太 (であい・ゆうた)さん
 派遣期間：2008年3月～2010年3月
 大学時代に全日本大学野球選手権に出場。卒業後はパン店で働いたのち、2008～10年に青年海外協力隊としてブルキナファソへ。現在は外国人と日本人と一緒に野球を学ぶ北海道ベースボールアカデミーの代表。18年6月、ブルキナファソ代表監督に就任し、来年の五輪アフリカ予選に挑む。
 応募時を思い出してひと言！
 きっかけは 夢見ていたことだったから。
 語学スキルは ほぼゼロ。
 家族の反応は 否定的。

ともに野球を楽しむ!



赴任中に各地域で五つの野球チームを設立。協力隊員を終えたのちもブルキナファソとの交流を続け、2012年、13年には日本から野球用具を贈った。



大学の講義の後、学生たちと記念撮影。「学生たちはとても熱心でレベルも高いです」と笑顔で話す。

自分と相手との接点を見つける

海外を舞台に経営コンサルタントとして活躍していた池田仁一さん。以前は欧州復興開発銀行(EBRD)のコンサルタントとして、旧ソ連圏の各国が市場経済へ移行するためのサポートを行っていた。2000年代初めにはモンゴル初の民間デパートの立ち上げに関わり、売り上げ・利益管理から商品陳列に至るまでアドバイスも行った。そのうち、日本の経験を伝えるような活動をもっとしたいとJICAのシニア海外ボランティアに応募。赴任地のメキシコでは、中小企業に経営全般のコンサルティングを、大学等では講義・講演を行っている。「要請内容は日本の先進事例を教

えてほしいということでした。しかし、話していくうちに彼らの気持ちも離れていくのを感じました。意図してはなくても、日本の自慢話をしていくと受け取られたようです。そこで、日本の成功事例だけでなく失敗事例も交え、また日本以外の国の話も加えたところたいへん興味を持って聞いてくれるようになりました」

長年にわたり海外で活動してきた池田さんだが、その原点は若いころのほろ苦い思い出だ。「19、20歳のころの私は、今というバックパッカーでアジアの国々を貧乏旅行しているいろいろな人にお世話になりました。当時はインターネットなどはなくて手紙でやりとりするしかなかったのですが、若気の至りで日本に帰ってもお札の手紙を一通も出さず不義理をしてしまいました。どこかで恩返し(罪滅ぼし)しないと、という気持ちでいました」

池田さんは、これから海外協力隊を目指す人に伝えたいことがあるという。「派遣された国で当初の要請と現地の事情が違うのは、当たり前のこと。現地に行つて自分のできる分野で努力を続けられれば、相手との接点は見つかるはず。そうすれば必ず結果が出て、自分自身も活動することが楽しくなっていきます」

若いころお世話になった人に恩返ししたい

経営管理(メキシコ)

池田 仁一 (いけだ・じんいち)さん
 派遣期間：2017年4月～2019年4月
 54歳までサラリーマン生活を送った後、経営コンサルタントとして国内外で活動。自分の専門を生かせる分野で何らかの形で役に立てればと協力隊に応募した。
 応募時を思い出してひと言！
 きっかけは 恩返しをしたかったから。
 語学スキルは 英語 TOEIC (925点)。

